

自分の思いや考えをもち、「伝え合う力」を育成する単元づくり

——国語科における評価や指導の工夫、学びの系統性を考えて——

教職実践応用領域 授業づくり履修モデル
磯村 千加子

1 「自分の考え」を話せない子ども

——授業実践・教育現場の課題から——

現行の国語の教科書（東京書籍）では、1年生を除いて年度当初に音読に重点をおいた教材やスピーチ単元が組まれている。以前4年生を担当し、これらの単元に取り組んだとき、クラスの2割強の児童がクラスメートの前で音読やスピーチをしなかった。

最大の原因は自分自身の指導力不足だが、それまでに学習しているはずの音声学的なスキルや発表の仕方などを学習していないこと、あるいは「全員に確かに」身につけていないこと、加えて、発表やスピーチの経験の少なさも一因であった。

クラスみんなが自分の思いを楽しく、豊かにスピーチできるようにしたい、誰もが「自分の考え」を自分らしく出し合う授業をしたい、そのためにはどんなことをしたらよいのかと考えながらの毎日であったが、その年は全員がスピーチすることはなかった。

2 「伝え合うこと」を中心に——研究実践の構想——

(1) 国語科の目標として

「伝え合う力」は、学習指導要領において国語の教科の目標に位置づけられている。これまで、「伝え合うこと」というと、「話すこと・聞くこと」のみに焦点が当てられ、スピーチやニュース番組の作成、ディベート、パネルディスカッションといった学力の評価が十分に伴わない言語活動の形式が取り上げられてきた。しかし、教科の目標である以上、「話すこと・聞くこと」の1領域に限定されるものではない。各学年の内容、指導事項にも、「話し合うこと」、「書いたものを読み合うこと」、「意見を述べ合うこと」、「読んで考えたことを発表し合うこと」、「助言し合うこと」といった「伝え合うこと」に関する記述が多いことから、「伝え合う力」は、「話すこと・聞くこと」を中心に「書くこと」、「読むこと」や「伝統的な言語文化や言語に関する事項」を含めた国語の授業全体で育成される力である。

(2) 習得・活用を明らかにした単元づくり

「伝え合う」ための前提には、一人一人の児童に自信をもって伝えられる内容をもたせること、自分の思いや考えを育てておくこと（言語化の方法を教えること）が必要となる。また、伝える方法や伝え方、例えば、形式やスキルの部分についてなど習得することが保証されていれば、自信をもって伝えることができる。そこで、基礎・基本（習得）を明確にし、それ

らを思考力・判断力・表現力などに活用し、「伝え合う」段階まで見通しがもてるような系統的な単元を構成し、実践したいと考えた。

(3) 学校全体で言語力を育てる——言語環境づくり——

① 言語力育成の中核としての国語科

今回の学習指導要領改訂では、どの教科においても、思考力・判断力・表現力を育むための基盤としての「言語力の育成」が求められている。特に国語科は、その中核をなす教科として、これまでよりもいっそう言語力の育成に力を入れることが必要とされている。中央教育審議会答申（平成20年1月）における国語科の改善の基本方針にも「各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身につけること」や「言葉を通して的確に理解し、論理的に思考し表現する能力、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成すること」が示されている。したがって、国語科で「伝え合う力」をつける系統的な指導をすること、伝え合う活動を十分に行うことが各教科にも生きる「言語力の育成」になると考える。さらに『小学校学習指導要領総則』にも言語活動の充実を支えるものとして、各学校における言語環境の整備の重要性が述べられている。

② 各教科で「学び合う」ための土台を（勤務校の実態）

勤務校である安城市立桜井小学校では、昨年度から「仲間を意識した学び合い」を研究の主題において、「自分は学級の中で役に立っている」、「授業では進んで発表したり、意見を言ったりしている」の2項目の評価が他より低かったことも「学び合い」を研究の中心にした一因である。実際に発表することに苦手意識をもつ児童は多く、担任ではなかった昨年度はいろいろなクラスに関わったが、授業が一部の児童の発言だけで進んでいくが多かったのは否めない。

現在、勤務校では、国語主任を担当している。取り組むべきことはたくさんあるが、発表が苦手という勤務校の児童の実態から、まずは、きちんと話をすること、そのためのよい聞き手を育てること、すなわち「話すこと・聞くこと」を切り口に、各教科で学び合うための土台づくりが、国語での「伝え合う力」につながると考えた。そこで、「伝え合う力」を育成することを単元の目標とした国語の授業研究をし、さらに、桜井小学校の児童の実態に合わせた「話すこと・聞くこと」の掲示物や指導すべき事項を一覧とした系統表を作成し、実践していく場の設定をその基盤として行いたいと考え、課題実践研究の主題とした。

2 学校全体の言語環境(実践概要 1)

(1) 「きちんと聞ける子どもに」—— 学校長の願い——

昨年度も、今年度も、勤務校の校長は年度当初に「まず、話が聞ける子どもに」、「先生の話も友達の話もきちんと聞ける子どもにしたい」という話をし、聞くことがかわり合い、認め合うことのスタートだと熱く語った。教育課程全体で「言語活動の充実」とそれを支える学校全体の「言語環境の整備」が求められていることと学校長の願いとを合わせてみると、「小学校学習指導要領総則編 解説」に挙げられている「教師と児童、児童相互の話し言葉が適切に行われるような状況をつくること」や「児童が集団の中で安心して話ができるような教師と児童、児童相互の好ましい人間関係を築くこと」につながる部分だと考える。

これまで、勤務校の教室には、それぞれの担任が工夫した掲示物があるが、直接的に言語活動に関わるものは少なく、学校全体で統一したものもなかった。そこで、今年度、言語環境づくりのひとつとして、言語活動のための「桜井小学校版『話すこと・聞くこと』」を作成し、全職員に提案し、実際に教室の掲示物として使用し始めた。作成にあたって、常に児童の目に触れるため、「聞くこと」について強く意識できること、発達段階を考慮し、国語科の「話すこと」と「話し合うこと」から全教科での学び合いに広がることに特に留意した(次ページ資料1)。

(2) 学び合いの基礎を育むための「スピーチ」

—— 話すこと・聞くことを継続的、系統的に——

学び合いの基礎を育む日常的な取り組みとして、また自信をもって話したり相手の立場に立って聞いたりすることができるような言語活動の場として、スピーチを全クラスで行うことを昨年度末の校内現職教育推進委員会で提案した。年度が改まり、現職教育全体会の今年度の方針の中でも教務主任から全クラスでスピーチを継続的に行うこと(朝に限らず、毎日の国語の時間や帰りの会などを使って)が提案された。そこで、行うにあたって、ねらいや具体的な方法を5月の現職教育全体会で示した。児童の実態に合わせ、継続的で系統的な指導ができるようにと、資料2「スピーチのテーマ例と指導事項」(次ページ)も提示した。

担任しているクラスでは、実際に5月から「朝の元氣調べ」という形で始めた。写真1のように児童に身につけるべきスキルを意識させて取り組んでいる。毎朝6人程度がテーマにしたがって話し、感想や質問を受けている。また、授業でスピーチに関する単元を行った場合には、授業内で数人がモデル的にスピーチを行い、残りの児童はこの朝のスピーチの時間を使って全員が行なった。構成を考えて書いた原稿をもとに授業中に班で聞き合って練習していたこともあって、児童の方も「きちんと話そう」と臨んでいた。どちらの場合も15分以内で終わる内容であった。

3 習得と活用を明確にした国語の授業(実践概要 2)

(1) 単元構想モデル

——「身につけさせる言語力」と「伝え合う活動」——

これまで勤務した中学校では、国語科や総合的な学習で単元を作り、実践してきた。教材を選択制にしたり、学習過程を自己追究の段階・共同追究の段階などに分けたりすることで生徒は追究することのおもしろさを体感し、記述の表現力を伸ばすなど一定の成果を上げたと思っている。一方で、国語科として何を評価すべきなのかは、残念ながら曖昧であった。

国語は評価がしにくいといわれ、実際それを感じてきた。しかし、佐藤洋一は、国語科の授業を説明文・文学教材の指導・話す・聞くなどの狭い領域の一教科学習をしてとらえてきたことによるものであるとしている。国語科の学習の役割には「二重性」があり、一つは全教科の言語力、言語活動の基盤であり、中核としての役割であるということ、もう一つは、国語科固有の指導事項を系統的に教えるという役割であるため、それらを明確に指導し、評価すれば、全教科に生きる言語力を身につけさせることができるとしている。

何を評価するのか、子どもの側からとらえれば、何を身につけるのか、すなわち、習得すべき基礎・基本事項(「身につけさせる言語力」)を明確にし、それらを活用する段階(「伝え合う活動」)を組み込んで単元を構想することにした。資料3はそのモデルである。これをもとに後述(2)、(3)、(4)のような単元を組み、実践を行った(実際には今年度このモデルを使い、5つの単元の実践を行っている。付記参照)。

資料3 単元構想モデル

単元構想にあたっての学習過程(習得・活用・探究)

(佐藤洋一の所説から作成)

学習段階		学 習 内 容
習得	習得 1	導入……伝えたいという思いがもてる教材との出会い (課題意識・学びの意欲)
	習得 2	基礎……全ての教科の礎となる力の学習(読む・書く・聞く・話す) 基本……国語科の礎となる力の学習(物語や説明文の読み方モデル)
活用	活用 1	わかりやすく書く力を育てる学習
	活用 2	話す力・聞く力・伝え合う力を育てる学習 (学びの中での関わり、学び合い・深め合い)
評価・一般化		学びの一般化・経験や実生活に生かす「振り返り」学習
探究・活用		国語科の学習から他教科・総合的な学習での探究・活用、充実した言語生活へ

資料1 「こえのものさし」1年生用(右上) 3年生以上(右中)

「聞くこと」を吹き出しにし、さらに3年生以上では「聴く」の表記を使用し、意識してきくことに重点を置いた。声の大きさについては、大きすぎる声を出さないこと、だれに話しているのかを意識できるよう工夫した。これにより、ペア学習やグループ学習など少人数でかわり合うときにも声の大きさを考えられるようにした。

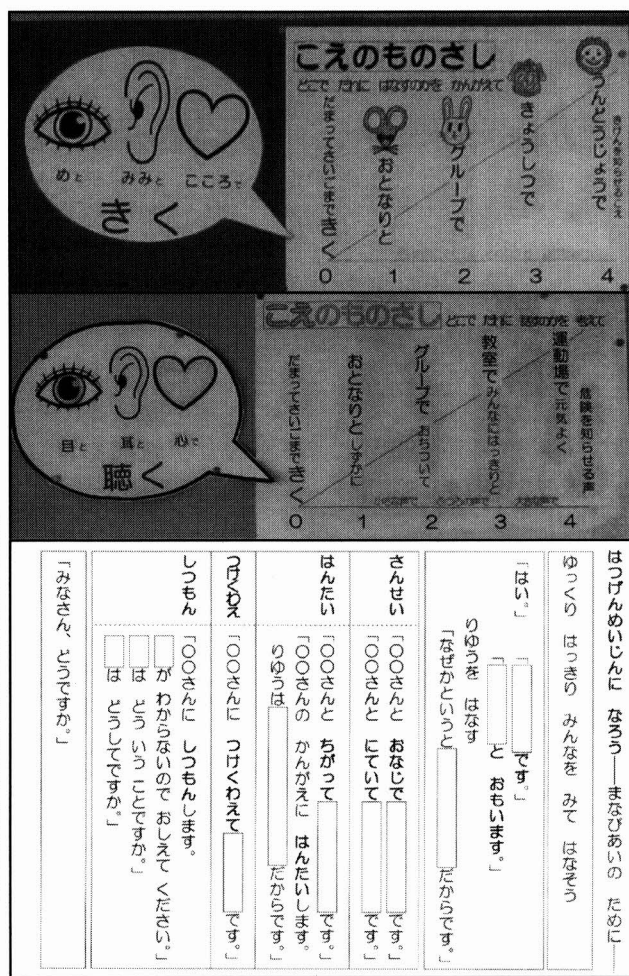
「はつげんめいじんになろう」低学年用(右下)

まずは、きちんと返事をし、文を意識して「～です。」「～ます。」を使って発言することができるように考えた。その上で、学び合いのためのつなぎのことばのヒントになるよなことばを選んで作成した。

写真1「背面黒板に書かれた朝のスピーチでの指導事項」

右は5月、左は10月のもの

行事予定		めあて	
日		五月十二日(水)	時間を守ろう チャイム着席
月	歌午集会	日曜	声り大きな教室のみんなへ
火	俳句旅行		話している人を見て
水	⑧なし 14:50 一さい下校	十月七日(木)	
木	音楽会合同練習	日曜	
金			
土			



【資料1-2】スピーチのテーマ例と指導事項

		1学期	2学期	3学期
4	内	○はい、元氣です。(2文加える……好きなこととその理由など) 食べ物、スポーツ、テレビなど	○夏休みの思い出 ○調べて話そう—学習からもう一歩つっこんで— ○新聞のニュースから ○好きな本、教えるね。(実物をもって)	○父母(家族)のことばかり考えたこと ○10年後のぼく・わたし ○4年生の思い出(写真や実物をもって) ○5年生になったら
	外	○みなさん、あのね。 (3文—いつ、どこで、だれと、なにを、した。理由、気持ち) ○発見したこと、最近気がついたこと		
	年	話す姿勢(礼。気をつけ、前・みんなを見る。礼)	引用を意識して話す	引用を意識して話す
	話	声の大きさ(元氣よく、教室のみんなに聞こえる声) 目線、はっきりした発音、「～です」、「～ます」を使って、最後まで 出来事を順序よく話す きく姿勢(話す人を見る、最後まで黙ってきく、拍手をする) 感想や質問をもつ	調べたこと、わかったこと、考えたことを区別して話す 本や新聞記事の写真や図を使って(できれば読み取って)話す 筋道を立てて話す キーワード、話の中心に気を付けてきく 自分の考えと同じところ、ちがうところを考えて聞く やりとり(質問する→答える→感想やお礼をいう)をする	写真や図を使って話す キーワード、話の中心に気を付けてきく 自分の考えと同じところ、ちがうところを考えて聞く やりとり(質問する→答える→感想やお礼をいう)をする
5	内	○はい、元氣です。2文加える……好きなこととその理由など) 食べ物、スポーツ、テレビなど 5年生でがんばりたいこと	○調べて話そう—学習からもう一歩つっこんで— ○新聞、テレビのニュースから ○心に残っていることば、大切なことばから ○たからものしょうかいします—写真やものををもって話そう—	○私が真つきたい話 ○6年生の思い出 ○ありがとう6年生—忘れられないできごと— ○6年生になったら
	外	○ぼく・わたしの得意技(自己紹介) ○友達スケッチ		

資料2 「スピーチのテーマ例と指導事項」

『小学校学習指導要領国語編解説 付録 系統表』を元に音声学的なスキルや話すこと・聞くことについての指導事項を系統的に入れた。年度初めには前学年までのことを繰り返し意識できるように組んだ。スピーチの内容例は、『スピーチ活動でどの子ものびる一クラスの人間関係が変わる、学習の基礎が育つ―』（中妻雅彦 ふきのとう書房 2003）の内容例を参考に、授業内容や学校行事などを考えて挙げている。

年	話す姿勢（礼、気をつけ、前・みんなを見る、礼）	引用を意識して話す	題名を工夫したり、呼びかけを使ったりして聞き手を引きつける
話	声の大きさ（元気よく、教室のみんなに聞こえる声）	調べたこと、わかったこと、考えたことを区別して話す	
す	口癖、はっきりした発音、「～です」、「～ます」を使って、最後まで	エピソードがわかるように話す	
き	間のとり方、ことばの抑揚、強弱（ついでになければ指導する）	題名を工夫したり、呼びかけを使ったりして聞き手を引きつける	
く	きき姿勢（話す人を見る、最後まで黙ってきく、拍手をする）	自分の考えと同じところ、ちがうところを考えて聞く	自分の考えと同じところ、ちがうところを考えて聞く
	自分の考えとくらべながらきく	やりとり（質問する→答える→感想やお礼をいう）をする	やりとり（質問する→答える→感想やお礼をいう）をする
	感想や質問をもつ	さらに感想や質問をもつ	さらに感想や質問をもつ

(2) 話すことの土台としての「聞く力＝メモする力」をつけるために

単元名 伝え合う力の土台となる、「聞く」力を伸ばすための基礎・基本
 ——正確に聞くポイントを知り、キーワードをメモをする力を身につけよう——

① この単元における身につけさせる言語力と伝え合う場

- ア 身につける「基礎の言語力」……すべての教科の土台となる言語力
- ・メモをとるための姿勢、えんぴつの持ち方、キーワード（5W1H）や数字を聞き取ること
 - ・発信・交流活動の基礎として聞いた内容と自分の経験と結びつけて、質問や感想をもつこと
- イ 国語科としての「基本の言語力」
- ・伝えたいことの中心を聞き取り、キーセンテンス化すること
 - ・発信・交流活動のために聞いた内容と自分の経験と結びつけて、質問や感想をもつこと
- ウ 伝え合う場……ア、イの理解を踏まえての活用場
- ・スピーチを聞いてメモを取り、質問や自分の意見・感想をもつこと

② 単元計画(2.5時間) (紙面の関係で学習シート①～⑥は省略)

階時	学 習 活 動	指 導 ・ 支 援 と 評 価
導入 ／ 習得 1 基礎 学習 習得 2 基本 学習 活用 評価 ・ 一般 化	1 メモをすることの重要性を知る (学習シート①)。	・これまでの見学学習でのメモについて想起させ、どのようなメモを取れば、活用できるのかを意識させる。
	2 電話での伝言を想定し、何をメモすればよいのかを知る (学習シート②)。	・記録のためのメモであり、メモを取ることが前提の状況で、どのように話したり、聞いたりすればよいかの技術を身につけさせる。
	1 聞くための基礎4つ (学習シート③) を知る。	(指導事項) 聞く姿勢、体と顔の向き、集中すること、鉛筆の持ち方、目線、キーワードを書く、5W1H、注意して聞くポイント4つ
	2 聞くための基本5つ (学習シート④) を知る。	(指導事項) いちばん伝えたいことの段落の位置、何が・どうした・何のために、キーセンテンス化、具体例と事実の数、意見と事実や例との区別
	3 「自分らしく聞くための6つ」(学習シート⑤)を知る。	(指導事項) 自分の考え・感想をもつこと
	4 モデルスピーチからメモのとり方を練習する。	・ここまでの学習のうち、1つでも意識して取り組んでいることを称賛する。
	5 ふり返りシートにメモをする。	

- 1 メモ＝聞くための観点が理解できたか。
- 2 今後の学習や生活に役立てようとしているか。

③ これから求められる「言語力」を育むために

ア 他教科につながるメモをする力(聞く力)

社会科や総合的な学習の時間などの見学学習ではメモを取るように指導することが多い。しかしメモをとることが重要だと分かっているにもかかわらず、何をどのように書くことがメモをとることなのか、児童にもメモのとり方について指導してこなかった。事実、児童のノートなどには何が書かれているのだが、その後の学習に十分に活用できていない。

『小学校学習指導要領解説 国語編』にも4年生の「話すこと・聞くこと」の指導項目の言語活動例として、「要点などをメモに取りながら聞くこと」が掲げられている。さらに、教科書(東書国語4年上)でも、友達のスピーチを聞くときにメモを取ることや電話での伝え合いに「だいじなことをメモする」ことが明示されている。それらにメモの例はあるが、実際に生活や学習に活用できるメモのとり方を指導することが必要である。国語科の学習の中でメモを取る行為そのものだけではなく、メモの目的を明らかにし、何をどのようにメモすればよいのかを理解し、情報を選択して聞き取った上でのメモを取ることを身につければ、他教科での表現活動につながる力になると思われる。

イ 学び合いのための聞く力

『聞く力(メモ)』は『読み解く力』とともに“情報の論理的な理解(受信能力)”の基礎・基本学習であり、また「豊かな『発信』『交流(学び合い)』は、正確な聞く力や論理的にメモする基礎・基本学力によって支えられ、生かされることにもっと目を向ける必要がある」(佐藤洋一)。

毎朝の元気調べ(スピーチ活動)によって、話すことは楽しいと思い始めている児童に対して、スピーチを聞いて内容が深まるような質問する力をつけてやりたい。さらにスピーチをしたクラスメートの思いを受け止める力をつけてやりたいとも思った。これらの力のためにはまず、「内容を正確に聞き取る力」が必要で、それらは、「メモをする力」と同意であろう。

一般にスピーチ活動と言われると、話すこと、発信することに重点が置かれるが、スピーチを正確に聞き、自分の考えや経験との共通点、相違点を見つけ、双方向のやりとり(交流)をすることで伝え合う力を養うことができる。他の考えを正しく認め、自己を高めようとする学び合いのある学級にするための土台としてのスピーチ活動、その基盤としての聞く力をつけたいと考えた。

(3) 物語文の構成を使って“家族に感謝するスピーチ”へ

単元名 論理的な読解から「わたしの成長」を伝えるスピーチ活動へ
——「走れ」(村中李衣 東京書籍 平成23年度版・4年上)を使って——

① この単元における身につけさせる言語力と伝え合う場

ア 身につける「基礎の言語力」……すべての教科の土台となる言語力

- ・ことばのまとまりや段落に気をつけ、音読すること
- ・論理的な構成に着目し、正確に読み取ること（読むこと）
- ・話の中心に気を付けて聞き、質問や感想を述べること（話すこと・聞くこと）

イ 国語科としての「基本の言語力」

- ・教材文について、中心人物の変化ときっかけを場面のまとまりの中でとらえること（読むこと）
- ・教材文の感想について聞いた内容と自分の経験とを結びつけて、自分の考えや質問、感想をもつこと

ウ 伝え合う場……ア、イの理解を踏まえての活用場

- ・『家族へありがとう』のスピーチの会」でスピーチを聞き合い、考えや感想、意見を交流すること

② 単元計画(10時間)

時	学 習 活 動	指 導 ・ 支 援 と 評 価
導入 ／ 習得 1 基礎	1 学習の流れを知る。 2 物語文の場面構成について知る。 3 「走れ」第1場面を読み、状況の設定を押さえる。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習シートを使って、単元全体の見通しをもたせる。 ・これまで学習した物語文を想起させ、場面構成や状況設定をとらえることが、「読むこと」のポイントであることを押さえる。 <div> 1 漢字や難語句に注意しながらすらすらと読めたか。 2 物語文のポイントを理解できたか。 </div>
習得 2 基本 学習	4 「走れ」第2場面から第4場面を読み、場面の展開を読み取る。 5 「走れ」の第5場面第6場面を読み、中心人物の変化を読み取る。 6 「走れ」の第7場面を読み、感想を書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習シートを使い、場面の展開、中心人物の変化の様子を押さえる。 ・登場人物についてわかる記述に線を引いて書き込むこと繰り返し行い、記述に即して読むこと、気持ちの変化をとらえることにつなげる。 ・場面ごとに感想の交流を行う際、まず話せたことを認め、記述に即した感想であれば、特に称賛し、他にも広げるようにする。 <div> 1 物語文の読み方を理解することができたか。 2 場面ごとに感想をもつことができたか。 3 中心人物の変化を読み取るすることができたか。 </div>
活用 1	7 物語文の場面展開を使って、「家族へ『ありがとう』」のスピーチ原稿を書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習シートを使い、教材文をモデルとした論理的な構成を押さえ、状況設定や自分の変化などがわかるようにした原稿を書かせる。 <div> 1 自分の成長を振り返り、家族に感謝する原稿を書けたか。 </div>
活用 2	8 スピーチの会で意見交流をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習シートを使い、聞くことや交流のための観点を確認できるようにする。 ・質問の中で、スピーチの内容を広げるものがあれば称賛する。 <div> 1 聞き手を意識した姿勢や視線、声の大きさや速さを考えて、話すことができたか。 2 感想や質問をもつことができたか。 3 話し手の伝えたいことや具体的なできごとを正確に聞けたか。 </div>
評価 ・ 一般 化	9 自分のスピーチを振り返り、「家族へ『ありがとう』」の作文を書く。 10 これまでの学習を振り返り、これからの作文や読書活動に生かせることを「評価シート」に書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・作文にまとめる際、スピーチの会での感想や質問も取り入れて書かせることで、内容をより具体的にさせる。 ・評価シートに記入させ、振り返らせる。 <div> 1 学習した内容を意識し、自己評価と一般化ができたか。 </div>

③ 実践のポイント——どんな言語力を、どのように身につけさせるか——

物語文に対して自分の考えが書けない児童は思いの外多い。何を書いたらよいのかわからない、話が長いからどの部分について書いたらよいのかわからないと言う。同様に、人の話を聞いて感想の感想や質問が言えない児童もいる。どちらも「情報の論理的な理解」ができていない、何をどう受信すればよいのかわかっていないことに一因がある。

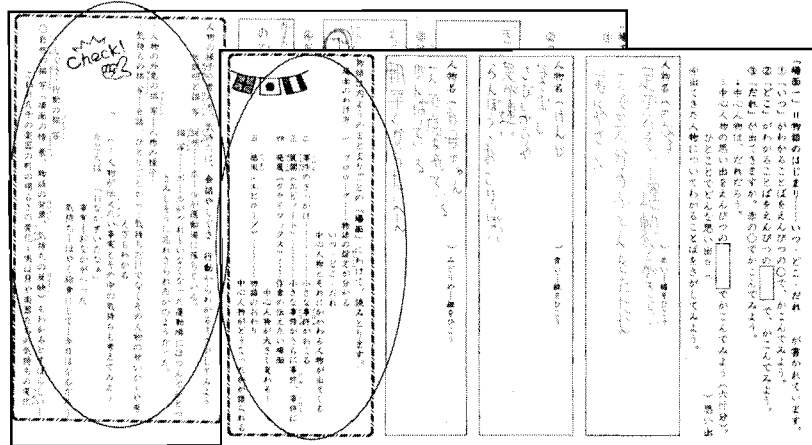
この単元で扱う教材文は、児童にとって身近な家族のこと、運動会のこと、場面構成や状況描写を理解させるのに適当である。また、ここで行うスピーチも、教材文の構成から発展させたものであるため、出来事や伝えたいことをとらえやすいと考えた。

まず、学習シートを使って単元全体の見通しをもたせたあと、物語を場面ごとにとらえることを理解させた。第2時から第4時の「基本学習」の段階では、学

習シート（**資料4**）で、物語文の「読み方」を教え、場面ごとに中心人物の変化について記述をもとに追いつながり、思ったことを聞いた。

第5時には、スピーチの原稿を書き（**資料5**）、その後、クラス全員が「家族へありがとう」のスピーチを行った。この単元の前に「伝え合う力の土台となる、『聞く』力を伸ばすための基礎・基本——正確に聞くポイントを知り、キーワードをメモをする力を身につけよう——」といった単元や毎朝のスピーチ活動を行っている。それらの学びも生かした、伝え合う場面にしたいと考え、学習シート（**資料6**）を工夫している。

さらに単元の最後にスピーチでの交流を生かして作文を再度書かせた。また「評価・振り返りシート」（**資料7**）で、児童にこの単元を通してどんな学力をどう身につけたか（到達度、評価基準）を確認させた。

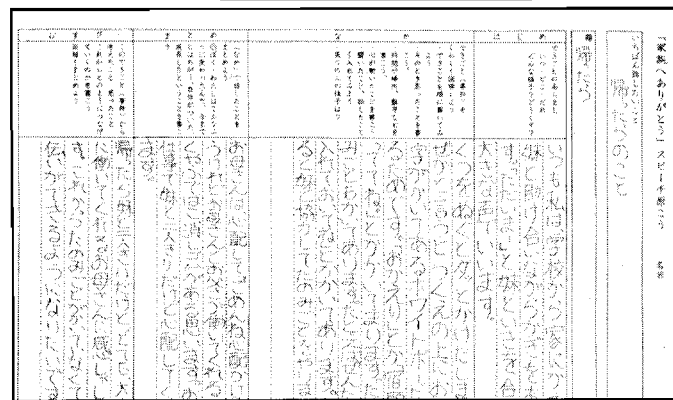


資料4

物語文の「読み方」も教える学習シート

シンプルに短時間で読み取れるだけでなく読み方（○の部分）も学べるよう工夫した。

物語文における場面の役割を考え、記述に即して中心人物の変化を追いつながり読み取らせている。



左

資料5

物語文の構成を使ったスピーチ原稿

構成を示し、何を書けばよいのかわかるようにしている。児童には具体例を挙げるよう指導した。

左下

資料6

聞く・交流のポイントがあるスピーチの会聞き取りシート

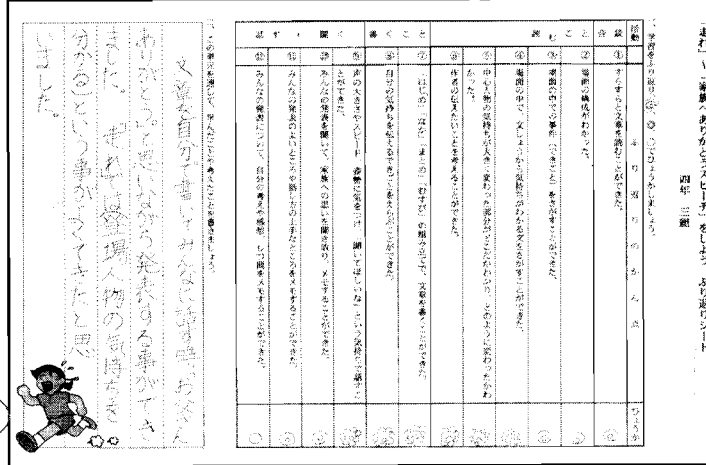
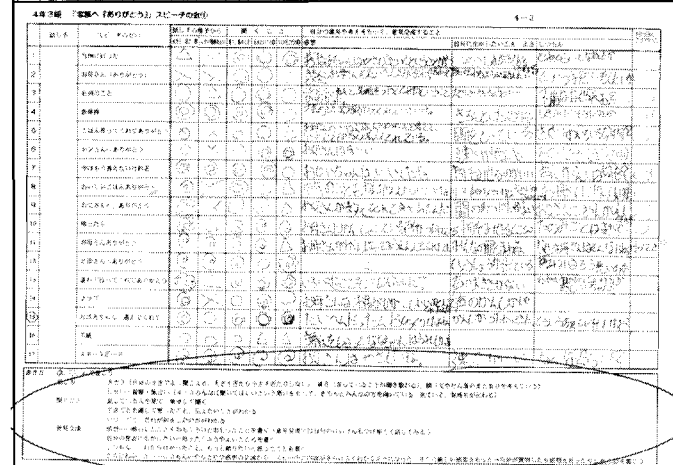
○の部分に聞くこと、交流のための観点を示した。

右下

資料7

到達度と評価基準を確認するための「評価・振り返りシート」

単元の始めに児童に示し、単元を通して「学びの系統性」があるようにした。



(4) 「伝統的な言語文化」を味わうスピーチから新たな表現(創作)活動へ

単元名 「伝統的な言語文化」に親しみ、日本語の美しさやリズム、季節感を味わう表現活動
——「すてきなはい句を紹介しよう——わたしのはい句物語——」(俳句の鑑賞)を通して——

① この単元における身につけさせる言語力と伝え合う場

ア 身につける「基礎の言語力」……すべての教科の土台となる言語力

- ・俳句について、形式や簡単な歴史などを理解すること
- ・ことば(日本語短詩型)のおもしろさや美しさ、リズムを感じながら音読や暗唱すること

イ 国語科としての「基本の言語力」

- ・俳句の構成や表現の工夫を理解すること

ウ 伝え合う場……ア、イの理解を踏まえての活用場面

- ・俳句の鑑賞文についてのスピーチを聞き合い、自分の考えや感想、意見を交流すること
- ・自分が創作した俳句について、自分で良さがわかり、自信をもって発信すること

② 「すてきなはい句を紹介しよう——わたしのはい句物語——」単元計画(6時間完了)

時	学 習 活 動	指 導 ・ 支 援 と 評 価
導入／ 習得1 基礎学習	1 季語クイズをする。 2 単元全体の見通しをもたせる。 3 俳句についての知識を確認する。 4 俳句の歴史に触れる。 5 松尾芭蕉や正岡子規の俳句を音読し、視写する。	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの自分が創作した俳句を振り返り、この単元では、いろいろな俳句を知ること、歴史があること、味わってみることで、さらに「伝統的な言語文化」としての俳句に興味をもつように話す。 ・楽しく学習に取り組むため、視覚に訴える具体物を提示したり、クイズ形式で取り組んだり、キーワード化したりする。 ・簡単に季節がわかる季語だけでなく、現代の感覚とは季節のずれている季語も取り上げ、古人のものの見方や感じ方にも触れ、次の学習につなげる。 <div> 1 俳句の魅力、ことばの豊かさに気づくことができたか。 2 生活経験とつなげて、関心・意欲がもてたか。 3 漢字や難語句、歴史的仮名遣いや文語調に注意しながらすらすらと読み、正確に視写することができたか。 4 この単元での学習に見通しをもつことができたか。 </div>
習得2 基本学習	2 6 俳句の表現の基本を理解する。 7 鑑賞のポイントを知る。 3 8 全員で同じ俳句について、ポイントを確認しながら鑑賞メモを書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習シート3を使いながら、俳句の形式や表現についての基本事項を押さえる。特に俳句の中に2つのイメージが描かれていることに着目させる。 ・学習シート4を使い、鑑賞のポイントを押さえた上で、全員が同じ俳句を鑑賞し、メモを書いた上で、意見交換をする。 <div> 1 俳句についての基本を理解できたか。 2 鑑賞についての基本がわかり、鑑賞メモを書くことができたか。 </div>
活用1	4 9 各自が選んだ俳句について、鑑賞文を書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習シート5を使い、モデル文を参考にしながら、鑑賞文を書く。 <div> 1 好きな俳句、関心をもった俳句を選び、その理由が書けたか。 2 俳句の感動の中心をとらえているか。 3 俳句のことばや構成の工夫(俳句の中に描かれた2つのイメージなど)をとらえているか。 4 鑑賞文の型に沿ってまとめられたか。 5 自分の書いた鑑賞文のよいところやここを見てほしいというところ(特色)が自分でわかっているか。(学習シート) </div>
活用2	5 10 グループで鑑賞文を読みあい、感想の交流を行う。 11 クラス全体で鑑賞のスピーチと感想の交流を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・グループの中で鑑賞文を読み合い、感想を書いたものは、クラス全体の鑑賞のスピーチの際に役立てよう助言する。 ・クラス全体での鑑賞スピーチについては、授業時間内にモデルスピーチを行う。朝のスピーチの時間を使って全員がスピーチをできるようにする。 <div> 1 聞き手を意識した姿勢や視線、声の大きさや速さを考えて、話すことができたか。 2 お互いの鑑賞文に対して、感想や質問をもつことができたか。 3 鑑賞文から伝えたいこと(俳句の感動の中心)やことばや構成の工夫などを理解することができたか。 </div>
評価・ 一般化	6 12 これまでの学習を振り返り、これからの俳句作りやスピーチに生かせることを「評価シート」に書く。 13 これまで作った俳句を見直したり、新たに作ってみたりする。	<ul style="list-style-type: none"> ・評価シートに記入させ、振り返らせる。 ・自分の俳句や新しく作った俳句について、この単元で学習した表現の工夫、2つのイメージを入れるといった視点から、見直すよう助言する。 <div> 1 学習した内容を意識し、自己評価と一般化ができたか。 2 俳句を作るときにイメージを入れようとしているか。 </div>

③ これから求められる「言語力」を育むために

言語感覚をはぐくむために、ここでは俳句を教材として取り上げた。『小学校学習指導要領解説国語編』では「言語感覚を養うことは、一人一人の児童の言語生活や言語活動を充実させ、ものの見方や考え方を個性化することに役立つ。」となっている。抽象的な考え方もできるようになってきた4年生に対して、語彙力をつけたい、語彙量を増やしたい、そこから豊かな言語感覚を身につけさせたいと考えた。

地域には、作句を楽しむ祖父母世代の方々もいる。ただ単に一人で俳句を覚えたり、作ったりするだけでなく、クラスメートや校内の他学年、家族、地域に向けて発信したり、地域の方から教えてもらったりするかわりあいの活動を設けることで、子どもの意欲にもつながり、より伝統的な言語文化に親しむことにもなるといった。児童が、例えばすてきな風景に出会っ

た時に覚えた俳句がふつと浮かぶ、あるいは俳句にしてみたいという思いをもってくれたら、と考えた。

すでに児童は4月から俳句の創作をしてきた。この単元では、俳句についての基本を俳句における表現の工夫を知ることと鑑賞のポイントを理解することととらえ(資料8)、国語の授業の中で教えた。鑑賞文にする際は物語にしようと呼びかけた(資料9 資料10)。鑑賞文というと、難しく感じても「お話ししよう」ならば、自由な発想で取り組みやすいのではないかなと思う。4年生に歴史的な背景や作者の置かれた状況などを正確に理解することは難しい。本来の鑑賞であればそれらを踏まえた上で書くべきで、この単元での鑑賞を「鑑賞文」と言うのは間違っているのかもしれない。しかし、十七音の短いことばの中に作者のあふれる思いや背景があることに児童が気づき、イメージをふくらませることを楽しませてやりたいと思った。

④ 実践のポイントを学習シートから——どんな言語力を、どのように身につけさせるか——

資料8 俳句の基本を学ぶための学習シート

右 感動の中心を理解し、7つのポイントで味わう

左 イメージ構成と表現の工夫を味わう

資料9 俳句を鑑賞するための学習シート

上記資料7のポイントを使って、俳句から読み取ったことをメモした。

資料10 俳句鑑賞文のスピーチ原稿

資料7のメモをもとに俳句と鑑賞した内容などを構成にしたがってスピーチ原稿にした。

鑑賞する俳句については、俳句音読シート(付記参照)や教材文(東京書籍 平成23年度版・3年下)から児童が自分で選んだ。

資料11 授業日記

その時間のめあてを記入し、振り返りとして自由記述の部分と「話すこと・聞くこと」について簡単に記号で書けるようにした。児童はとても楽しんで書いていた。また、理解度を確認するのにも役だった。

4 課題実践研究の反省と考察

(1) 学校全体の言語環境づくりとして

① 掲示物について——全担任・学年への対応——

「話すこと・聞くこと」について校内で統一した掲示物を作成した。12月末の先生へのアンケートから「聞くことを重視した声のものさし」は、「活用した」が9割で、グループでの話し合いなど「聞くこと」、「大きすぎる声を出さないこと」を指示する場面での活用がほとんどだった。100%が次年度も「あった方がよい」と回答している。一方、「はつげんめいじんになろう」(話型の掲示)は、次年度も「あった方がよい」が100%にもかかわらず、活用したクラスは1割に満たない。

担任しているクラスでは、1学期は児童も意識して掲示物を見て話をつなげていたが、2学期半ばからは話型にとらわれずに話している。「低学年で十分指導した後、高学年では話型にとらわれず話させたい」という低学年担当の先生の記述ともあわせ、年度当初に、どう活用し指導するかを校内で検討する必要がある。

② スピーチ活動——全教科・活用の基礎として——

ほとんどのクラスがほぼ毎日スピーチに取り組んでいるが、学び合いの基礎というねらいには達していない。担任しているクラスでは指導項目を明確にし、テーマを決めて行ってきた。5月末頃まで、話し方や質問の内容についてその場でずいぶん指導した。まだ児童の差もあり指導したいと思うこともあるが、にこにこ聞くことにしている。児童もスピーチの内容をあらかじめ考え、時にはメモや具体物を用意し、教室全体に向かって話し、笑いながら楽しそうに聞いている。

4月、7月中旬、12月に児童にとったアンケートの「話すことが好き、楽しい」は45%→68%→84%、「聞くことが好き、楽しい」54%→70%→98%という結果がスピーチ活動の何よりの成果である。現在はクラスの8割程度の児童が、他教科の発表でも、例を挙げ、写真を示し、方法や使い方など手順を追って説明するなど、4年生として十分なスキルを身につけ、活用できる力をもっている。スピーチ活動について校内にも優れた実践をしている先生がいる。それらをどう広げるか、もう一歩進めるためにどうするのが課題である。

(2) 国語科の授業として

① 授業日記で意欲の継続、めあてと振り返りを

日頃は、各教科でノートに学習のめあてを書き、ごく簡単に振り返りをさせている。「伝え合う力」の育成に主眼を置いた単元を今年度5つ実践したが、ここでは、画用紙に授業日記を書き、振り返りをさせてきた(資料11)。2つ目の実践から画用紙の授業日記を配ると「先生、今度は何のスピーチやるの?」と児童が楽しみにしだした。児童の国語の授業に関するアンケートからも「授業日記がおもしろい」、「先生が自分の授業日記を読んでくれてうれしい」、と前向きな記述が多く、また、「勉強したことをすぐ書ける」、「は

いくはね ふたついれると いいんだよ」、「よく読んだ 芭蕉のはい句は かつこいい」など授業の内容に関するものもよく見られた。学習のめあてへの意識と意欲の継続になった。「社会でもメモをすることが多いので、数字に気をつけて聞きたい。」、「今日勉強したアップの写真をとって、スピーチに使いたい。」といった記述からは、導入の段階でどんな言語活動をし、どんな力をつけるかを明確にしたことが生きている。

② 「論理的に読む力」を育成する教材研究(学習シート)

5つの単元のうち3つは教科書の教材文を読み取ることをもとにし、残りの2つの単元も導入で教科書教材を使用した。研究実践では、教材文を正確に論理的に読み取ること、そのために「読み取り方も教える学習シート」になるように教材研究を行った。また、普段の国語の授業でも同様の学習シートを作成し、学習を進めた。昨年度の4年生で予備的に行った実践では説明文の読み取りの学習シートに3時間かかったが、今年度同じ学習シートに対して、1時間かかっていない。読み取りの学習シートに繰り返し取り組んだことで、学習シートの意味と活用方法にも慣れ、「情報を論理的に読むポイント」もつかんできたと考えている。

③ 習得・活用を生かす「伝え合う力」の育成

活用1で、構成を明確にしたモデル文を提示し、児童にスピーチ原稿を書かせた。およそどの児童も原稿を書くことができた。活用2では、それをもとにスピーチをし、一方的な発表ではなく、考えや感想を言い、質疑応答をするなど伝え合うことを行った。その後の評価・一般化の段階でスピーチ原稿を作文やまとめに書き直させると、交流の場面での質疑や他の児童の感想が生かされているものが多かった。例えば、家族へのありがとうのスピーチでは、スピーチ原稿とその後の作文とでは、量的に増えただけでなく、文章そのものがつけ加えられたものは8割弱(23/34人)になる。話し手も聞き手も伝えたいことが何か、どう伝えれば自分の思いがより説得力をもって伝えられるかを自覚しはじめた結果と見ることができる。

④ 評価——学びの自覚と実生活での活用・探究へ——

本稿は、まずこれまで漠然としていた「習得」「活用」など身につけさせるべき言語力(言語活動)を明らかにしての国語科単元づくりの実践開発・提案であることが特色である。「書く・読む」学習では、「学習シート」を埋めることはできてもそれでよいのか児童は不安がったが、その活用と論理的な文章化の指導によって個々の思考・判断・表現力が深まりはじめた。

「話す・聞く」ではその場で認めることで自信をつけさせ、聞く観点と評価規準を示した。どの単元もまとめとして「振り返り・評価シート」を使い、児童に自己評価させた。実際に身についたか、自覚できたかの評価は、違う教材や各教科での言語活動、家庭での会話などで活用できるかである。

5 実践テーマからの提案

(1) 身につけさせる言語力を「系統的に」

単元の中での系統的指導だけでなく、6年間・9年間を見通した「系統的指導と評価」を、どの教材で、どのような場面で行えるかを再考する必要がある。

(2) 伝えたい教材と伝え合う場の保証

言語活動ばかり重視すると、どんな学力をつけるのかが教師にも児童にも見えず、言語活動のネタさしだけの授業になる。「話したい」、「書きたい」と思うような教材開発や「つける言語力を明確にした伝え合う場面の設定」が児童の意欲にも言語力にもつながる。

(3) 国語科と各教科とのつながりの明確化

国語科は言語力育成の中核の教科で、各教科・活動全ての土台である。各教科・活動での言語活動がどんな「思考力・判断力・表現力など」を育成するのかを十分理解し、習得から活用の方法と場面を保証、言語活動の意味を明確にすることが重要である。

(4) 学校の言語環境整備のキーワード化

勤務校では、「聞くことを大事にしたい」という学校長の思いから言語環境の整備を始めた。学校全体として、まずどんな言語力を育てたいのかを明確にすることが言語環境整備と授業実践の推進力となる。

おわりに

まもなく学習指導要領の全面実施とそれに伴う新しい教科書による授業がスタートする。改訂の要点としてあげられている「学習過程の明確化」と「習得・活用」の重視をもとに、「伝え合う力」を育成するための単元の実践を行ったが、「話すこと・聞くこと」から「書くこと」、「読むこと」とのつながりを考え、ど

んな言語力を身につけさせるのかをさらに明確にする必要がある。国語科での「言語活動の充実（言語力の系統的指導）」が各教科や領域で生きてはたらく真の活用力にするためにも、児童に求められている言語力とは何か、言語環境の整備と教育課程の重点化とは何かを改めて整理し、考察した上で、全校に広がる具体的・系統的な実践を進めていきたい。

付 記

愛知教育大学教職大学院において研修する機会を与えていただきました愛知県教育委員会、西三河教育事務所、安城市教育委員会にお礼申し上げます。また、現任教安城市立桜井小学校柴田富子校長、教職員のみなさまには、研修にご理解とご協力をいただき、大変感謝しております。教職大学院佐藤洋一教授、蜂須賀渉准教授はじめ諸先生方にも、とても丁寧に教えていただき、新しい視点をもつことができました。2年間の教職大学院で学んだことを少しでも現場の先生方、子どもたちに還元できるように研究実践を進めていきたいと思っています。ありがとうございました。

なお、紙面の関係で本稿に載せられなかった学習シートの詳細や他の実践単元（「説明的文章の読み取りから写真や資料を活用してのスピーチへ」、「グループ活動の中で詩の楽しさやオノマトペのおもしろさを伝える群読・スピーチ」）については別冊報告書を、また、「伝統的な言語文化」を味わうスピーチから新たな表現（創作）活動へを実践するための「伝統的な言語文化に親しむ」取り組みについては、磯村千加子「毎朝3分で『伝統的な言語文化』に親しむ」（『国語教育 2011年3月号』明治図書）を参照していただきたい。

主な参考文献

1. 学習指導要領等

『小学校学習指導要領』（文部科学省 2008.3）『中学校学習指導要領』（文部科学省 2008.3）『小学校学習指導要領総則』（文部科学省 2008.8）
『小学校学習指導要領解説 国語編』（文部科学省 2008.8）『中学校学習指導要領解説 国語編』（文部科学省 2008.9）
「中央教育審議会答申」（2008.1.17）『幼稚園教育要領、小学校学習指導要領及び中学校学習指導要領の改訂案等のポイント』（文部科学省 2008.2.15）

2. 言語力の育成、国語教育について

「言語力の育成方策について（報告書案）」（文部科学省言語力育成協力者会議第8回配付資料 修正案・反映版 2007.8.17）
梶田毅一、甲斐睦明：『「言語力」を育てる授業づくり・小学校』（図書文化社 2009.9）
『国語教育 2008年6月臨時増刊 新学習指導要領国語科の長所と短所』（国語教育研究所編 明治図書 2008）
『国語教育 2009年2月臨時増刊 論理的な記述力の開発に挑む——「習得」から「活用」へ——』（国語教育研究所編 明治図書 2009）
『国語教育 2009年8月臨時増刊 新国語科の「解説」を言語活動に生かす——実践課題は何か——』（国語教育研究所編 明治図書 2009）
『平成20年度版 小学校新学習指導要領 ポイントと授業づくり 国語』（国語力向上モデル研究会編 東洋館出版社 2008）
佐藤洋一：「全教科等で行う言語活動の充実をどう進めるか」（教育開発研究所『小学校中学校移行措置への対応のポイント』2008）
佐藤洋一：「論理的に聴き発信する学力を鍛える」（明治図書『授業研究21』2009.2）
佐藤洋一：「求められる言語環境の整備、その条件」（財）教育調査研究所『教育展望』2009.6）
佐藤洋一：「これから求められる学力と国語科の指導——要約指導でまとめる力・聞く力を」（図書文化社『指導と評価』2009.10）
佐藤洋一：「導入と振り返り・発言評価の三項目」（明治図書『授業研究21』2009.10）

3. 実践にあたって

『国語教育別冊 「生きる力」を育む国語学習 音読・朗読・群読で国語の基礎力を鍛える』（21世紀の国語教育を創る会編 明治図書 2000）
『実践国語研究299号』移行期・新課程の重点指導 言語活動を重視した学校ぐるみの取り組み（須田実 瀬川榮志 共同編集 明治図書 2010.3）
『確かな学力が身につく小学校各教科別・領域別学習のしつけ』（鹿児島市立田上小学校著 教育MOOK改訂増補版 小学館 2007.3）
蜂須賀渉：『子どもが活躍！算数授業創造のネタ30選——「かわり合い」から授業をみかき・子どもを鍛える——』（監修：志水廣 明治図書 2006）
中妻雅彦：『スピーチ活動でどの子ものびる——クラスの人間関係が変わる、学習の基礎が育つ——』（ふきのとう書房 2003.8）
山田敏弘：『国語教師が知っておきたい日本語音声・音声言語』（くろしお出版 2007）
佐藤洋一、尾崎和美：『説明文を「正確に読み解く」学習から論理的な発信・交流へ——『イースター島にはなぜ森林がないのか』（小学校6年）を例に——』（愛知教育大学教育実践総合センター紀要第10号 2007.2）
『言語技術教育19「伝統的な言語文化」を深める授業力とは——あなたの言語力で子どもが育つ——』（日本言語技術学会編 明治図書 2010）
佐藤洋一：「論理的な「言語力」を育てる韻文の授業——短歌（和歌）・俳句の楽しさ、魅力を味わい、言語能力を身につける——」（2004.6 講演資料）
水野彦彦：「楽しく学べる詩歌の指導を考える——実践事例の紹介と演習を交えながら——」（2010.8 講演資料）
岡 篤：『教室俳句で言語活動を活性化する』（2010 明治図書）